
私は、お嬢様ですよっ！！！！

ゆながりか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は、お嬢様ですよっ！！！！

【Nコード】

N6891J

【作者名】

ゆながりか

【あらすじ】

わたしはあやのこうじのこと
私、綾小路琴葉は、お嬢様ですの。それなのに……執事達は、私に逆らってばかり。

一人は、見かけクールで中身どM。

一人は、見かけ甘系で中身どS。

私のお嬢様ライフ、どうなっちゃうのおおー？

・プロローグ・ 最低な日

よりもよって。

今日に限って。

高杉が、いない。

よりもよって。

今日に限って。

アイツが、いる……。

「で？おまえは、何で俺から遠ざかってるわけ？」

「っな……っ！べ、別に、遠ざかってなんか……」

「じゃあ、何でその足は後ろに下がってるの？」

「っ、これは……」

「そういうことすると、おしおきしちゃっつよ？」

そういえば、今日やってたっけ？

星座占い 十二位 ふたご座

……信じてなんていなかったけど……確かに、最悪な日も。

「お、おしおきって……っ！……わ、私は、わたくしお嬢様ですよおお
ー！」

「そういうの、今、関係ないでしょ……。先輩もないし……。それに、先輩だって、好き勝手にしてるじゃん？」

今日は高杉はお休み。

パパとママは今も世界一周中。

この、バカヤローー！

「高杉は、好き勝手になんて、してない、し……っ！？」

背中に、壁が当たる。

普段は広いと思うリビングだけど……もっと広くしてくれー！

「……あのさ、そういうの、我慢できないし……」

視線を壁にやった瞬間、こいつは私の目の前にやってきた。
……ヤバ、い……？

「が、我慢、て……」

「そういうカワイイ顔しないでくれる、お嬢様……」

う、うきゃっ！……！

顔が、近い、ちかあああい……！

耳元でささやかれて、頭がクラクラ……。

っていうか、私が耳弱い知ってるよねええー！！！！

「も、もう、この馬鹿執事いい！」

「馬鹿とは失礼な。それでも、頭を使って、お嬢様とイチャつく作戦を練っていたのに」

その一言が余計なんだよおお！！！！
顔が真っ赤になるのがわかる……っ

そう、こいつは……どSなの！

「そうだ、きちんと名前で呼んでくださいね、お嬢様」

「……雨宮。さっさと仕事に戻って！それと、私も名前で呼んだんだから、雨宮も名前で呼んでっ」

「……わかりましたよ、こはる琴葉お嬢様？」

……上出来じゃないか。

第一章 最低な出会い

アイツとの出会いは、最悪最低…だった。
だって、いきなり会って最初の一言が、これ。

「おまえ、胸小さいな……」

しかも、耳元でささやかれて。
その言葉に、かなりムカつとくる。

「何ですってえええ！誰が小さいよ！私だって、Bカップくらいは
ありま……」

と、ついつい道端で叫んでいた。
だって、ムカついたし。
でも、アイツは……それを、横目で笑っていた……。
最低……。

その後、アイツは高杉のところでもいたずら。

「何だとおおお！誰が趣味悪いじゃあ！」

普段は全く怒らない高杉が、珍しく怒っている。
こわっ！

「さてと、あいさつはこれくらいにしておいて……」

何があいさつじゃ！

だいたい、もっとマシなあいさつはないのかっ！

「俺の名前は、あまみやさつき雨宮皋月。今日からここ、綾小路家の執事となった
…よろしく」

……？

高杉と顔を見合わせる。

どういう、こと……？

我が綾小路家は、先祖代々伝わるお金持ち。
そこで生まれた長女が、私、あやのこうじ綾小路琴葉。
私は、由緒代々伝わる綾小路家の誇りをもつて今まで生きてきた。
だから、表はとっても柄の良いお嬢様。

でも……

学園で毎日笑って過ごすのって、大変なんだよねえ……。……。
それで、私のストレス発散が、高杉イジリ。
勘違いしないでね、いじめじゃなくて、イジリだからね。

「お嬢様、こやつを追い払いましょうか」

「ええ、よろしく頼むわ、高杉」

「かしこまりました。ですが、もちろん今日の午後は……」

「わかってるわよ、精一杯イジッてやるから、安心しなさい」

わかんと思うけど、高杉はうちの執事。
超一流の執事。

なんだけど……

こいつは……超ど級の、どMなの……！

見かけ、黒髪にめがねという、普通はSと間違えられるようなのに、
中身はM。

っていうか、ある意味病気かも……。

「お引取り願います……。綾小路家では、新しい執事を雇う予定は到底ありませんので……」

「あつらあ！パパン、もう新人さんが来たわよお」

「いつやあん！ママァン、本当かい？」

……聞いているだけで腹立たしいわ……っ
これ、家のママとパパ。

聞いているとわかるだろうけど、超能天気な二人です。

「琴葉、パパンとママは、世界一周旅行にいつてくるからね」

……はっ？

せ、世界、一周ううう……！？

「どついうことですか、お父様、お母様」

「つ・ま・り ママンと僕は、僕の世界一周コンサートに行くんだよ！そこで旅行に行く間、二人じゃ不便かもしれないから、この、

雨宮臯月君を呼んだのさ」

……。

ええ~~~~つつつ!!!!???

こ、こいつ、本当にうちの執事になるの?!?
っていうか、パパもママもいなくなるの!?
私とこの二人!?

は、はあ、はあ……「!?’を使いすぎて疲れた……。

「っていうわけで、よろしくな、琴葉お嬢様」

……この世は、地獄なり……。

第一章 最低な出会い（後書き）

スイマセン、この前は切羽詰っていて、ご挨拶が遅れてしまって…。

私、ゆながりかです！

はじめまして…の方もいるよね???

えっと、改めてご紹介させていただくと……小説を書くしか才能なし！の作者です。

顔も十分人並みです……。

って、自己紹介はこれくらいですね。

今回、このお話を書くに当たりました……って、堅苦しいな…。

このお話は、お嬢様系でえす

まあ、一度は書いてみたかったとSとMの対決ですね

ああ、青春……！

私も、お嬢様生活を送ってみたいです……まあ、うちはお嬢様じゃないからしょうがないですけどね。

ともかく、こんな作者ですが、どうぞよろしくということですよ。それと、今まだ「王子様を求めて。」の方が終わっていないので、おそらくこっちは二週間に一回くらいのペースで更新予定です。よかったら、「王子様を求めて。」も、見てみてくださいねあっちは、毎日更新予定なので。

それでは、またどこかでお会いしましょう！

b y , ゆながりか + *。

第二章 まさかのまさか、二人きり…。

「お嬢様、明日はお暇をもらいたいのですが」

「あら、高杉。珍しいわね」

「ええ。実家の母親が、急に熱を出したらしく。また、明日は綾小路家の使用人を全員お休みにしとございます。一年に一度の大休日というわけですが……」

「よろしくてよ。今日からでもいいわ。今日と明日、いつてきなさい」

「……ありがとうございます」

綾小路家に使える高杉たかすぎらいう雷雨は、前に言ったとおり、どM。そのことは、私と雷雨以外は知らない…はずだった。

「ところで、お嬢様。今日も、どついてくださ……」

バツシイイーン……！！

ビンタの音が、部屋中に響き渡る。

「ありがとうございます、おじょうさま……」

「へえ…。先輩は、Mなんですかあ。それも、超ど級の。人は、見かけによりませんね」

いやあな声が聞こえた。
この声って、まさか……

「雨宮。なぜここにいるんですの？」

なるべく礼儀正しい言葉で返す。

この声は、我が家の新しい執事、雨宮皐月。
最低最悪のどSである。

「まあ、情報ゲット、かな？」

「……。今すぐここから立ち去りなさい。今日と明日は、休みにするのですわ。ですから、今すぐこの屋敷から出て行ってください。」

ヤバイ。

このことは、誰にも知られてはならないんだから。

ここ、綾小路家に仕える執事が、どMだなんて。

こんな事が世にしたら、マズイ。
かなり、ね。

「無理だね」。その間、お嬢様一人なんでしょう？俺が面倒見てやるよ」

カチン。

なによ、その言葉使いは！
それが私に対する態度！？

「雨宮。お嬢様に対する態度を改めなさい」

私が言う前に、高杉がフォローしてくれる。
そうよ、なんでそんなため口なのよ！

「はい、先輩。でもさー、先輩も、大変ですよねー。こおゝんなお嬢様に雇われるなんて。それに、この人にどつかれるなんてー、かわいそー。俺がどつきましようかー？あ、でもー、お嬢様にどつかれたいのかなー？なんでー？それってえ、まさかあゝ」

ちよつ、高杉？

確実に高杉の肩が震えている。
な、なんで？

「それ以上言つと、即刻クビですよ」

ふるえる声で言う高杉。

そくだそくだー、クビだ！

「あつれー？でもお、俺つてば、ご主人様に雇われたからー。クビつて、無理かもー。ですね」

ムッカー。

ム力つくんですけど、この最低執事。

「ちよつと、高杉！何か言つてやりなさ……」

「お嬢様、それでは。使用人達には、言っておきますので」
えっ！？

ちょ、ちよつと、高杉、どこに行くのよ！

この最低最悪の執事を連れて行きなさいよおお！

「あれ、先輩、逃げちゃいましたねー。ってことはあ、今日と明日は、お嬢様と俺、二人きりかなー」

顔から血の気がひいていくのがわかる。

ちよつ、ちよつと待て。

それって、ヤバくないか？

こんな奴と、二人きり？？？

いやあああー！！！！

「……雨宮、私を一人にさせて」

「えーっ。つまんねー」

「なら、皿洗いでもして。使用人がいないんですもの」

「はぁーい……でもさー」

「何よ、このどS執事……っ！って……何で近寄ってきてるのよお！……」

プロローグへと続く。

第三章 真剣なアイツ。

「お嬢様？昼食のお時間です」

「……。今日は、一人でっ。食べるからっ」

「へえ〜。この状態でも、そんなことが言えるんですね、琴葉お嬢様は」

う、うう〜……。

状況最悪。

この、悪魔が！

今の状況を整理してみると……
雨宮に、抱きかかえられている。
しかも、お姫様抱っこで。
以上……。

は、早くおろしなさい！！！！

「ちよっ、雨宮。命令よ、おろしな、さっ」

「そうですねえ〜。キス、してくれたら、下ろしましょうか？」

なっ……………！！！！

何を、言ってるのよ、このSが！

最低……っ

「そんなこと、できるわけないでしょおお！」

お嬢様言葉を使うのも忘れて、叫んでしまった。
や、ヤバッ！

「い、今は、ナシ、ですわ！」

こ、こうなったら……

ジタバタともかくのも無駄な抵抗だと感じた私は、雨宮を睨みつける。

も、もう、こんな状況我慢できないんだからっ

「き、キス、するわよっ」

「へえ〜。じゃ、お願いしますよ？」

う、うわっ！

顔をギリギリまで近づかされて、体がビクッと反応する。
やだやだ、どうしてこんなに反応してるのよ〜！

ど、どうすれば、いいの???

「や、っぱり、やめた！下ろしてよ、馬鹿」

「ん〜？まあいいでしょう。かわいい顔が拝見できたことですしね」
なっ！

顔が真っ赤になっているのがわかる。
目の前にいる悪魔が、ニヤリと笑った。
くそ、またしても……！

「それでは、昼食の準備をしてまいります」

そう言っつて、雨宮が出て行つた瞬間、肩の力が抜けるのがわかる。
ふう……っ
も、もう、疲れる……。

「ああ、もうっ！あの、どS男めが！」

今度来たら、追いつ返してやるんだから！
へ、変な行動をとつたら、パパやママに言つて、クビにしてやる！

あ……。

そつだ、クビにすればいいんじゃないか。
つていうか、その話題を持ち出せば……私の言つことを聞いてくれるかも！

「ちよつと、雨宮！」

「何でしょうか、お嬢様」

「今後、私に逆らつたらクビにするんだからね！わかつてるの？」

「……」

やった、勝つた！

雨宮が黙つた瞬間、そう感じた。

だって、何も言い返してこないし。
これって、負けを認めるってことでしょ？

「……お嬢様は、本当にそれでも平気なのですか？」

え……？

何言って……

雨宮を見た瞬間、その真剣なまなざしに、なぜかドキッとするのが
わかった。

やだ、何ときめいちゃってるのよ。

「……お嬢様の判断にお任せします」

バタン。

いつもなら、無理矢理でも、一緒に食事をするのに。
今日は、なぜか。

一人ぼっちの、食事。

それが、こんなにも寂しいなんて。
初めての、感覚だった。

雨宮、私は、どうすればいいのよ。

・エピソード・

「もぉ~~~~っ！どうして、アイツの事がこんなに気になるの？」

ああー、もうっ！

だって、アイツってば、あんな意味深なことを言ってから出て行くし。

それに……

あんな顔されたら、嫌でも気になる……。

「ああーっ！もう、こんな考えはやめ！直接聞きに行けばいいだけですわ！」

そうよ！

ご主人様からのご命令なんだから、アイツも逆らえないはず。

で、雨宮はどこ???

えっと、皿洗い？

いや、お皿はここにあるし。

洗濯？

ううん……。

アイツが、マジメに洗濯をやるとは思えない。

「雨宮？」

広い屋敷の中を一人で探索。
うう……。……。

暗い！！！！

暗い、暗すぎるよ……！！！！

別に、暗いのは怖くない。

そう、お化けなんて信じない主義だもん！

ガタガタ……ガタン。

•
•
•
•
•
○

顔から血の気がひいていく私。

やだ、
何でドアが勝手に開いているの？

ま、まさか、お化け？

「おじょうさま？」

⌈
...!
⌋

!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!

あ
.....
○

目の前にいるのは、雨宮。

「驚かさなくてくださる？」

「なあんんだ、怖くないの？」

「もちろんですわ！」

そう、この綾小路家の長女の私（というか、一人っ子）が、お化けなどというものを怖がるはずが……

ギギギギイゝ……。

……。

「あ、雨宮？驚かそうとしても無駄ですよ？」

「……俺、ここにいるんですけど……」

……。

体の震えが止まらない。

はつきり言うけど、私は反応が遅いだけで、本当はお化けとかむっちゃくちや怖いんだから！

ってか、ありえない、何で扉が勝手に！？

「は、早く行くわよ、雨宮！」

「……もしかして、お嬢様、怖いのか？」

……。

バレた？

探るような雨宮の目が、どんどんニヤニヤと細くなっていく。

「やだなゝ、お嬢様。最初からそう言ってくればよかったのに。さ、探検しましょーか」

「いやあゝ！！！！む、無理無理無理！！！！こ、怖いし……っ」

「それがいいんじゃないですか。お嬢様がこんなに怖がるなんて」

「……こ、この、どSがああ！！！！」

私の怒鳴り声は、屋敷を響き渡った。

ああゝ、最低！！！！

「おもしろかったですね、お嬢様」

「う、ううゝ……っ」

「……泣いてる？」

「そ、そんなわけないでしょっ！！！」

ど、どこまでSでいれば気が済むのよ！

探検が終わっても、私の震えは止まらない。
だ、だって、怖いし……。

「で、本題。お嬢様は、どうして俺を追いかけてきたの？」

「うっ！！！！そ、それは……」

いきなり、そんな真剣な顔で見ないでよ。

ただでさえ綺麗な顔が、私を真っ直ぐに見ているって思うと……。
やだ、変な気分。

「俺のことで、悩んでいたり？」

「う」

「俺が言った言葉、気にしてたり？」

「うう」

「実は、俺がいなくなったらとか、寂しかったりして？」

「……べ、別に」

やだやだ、私が考えていた事とピッタリなんて言えないし。
っていうか、どうしてこんなにカンがいいのよっ！

「別に、ちよつといなくなつた時を想像して、悲しくなったり、さ
つきの言葉で、悩んだり、っていうか、第一、アンタのことを考
えるとか、そういうの、全然してないから！」

「……考えてたんだ、俺の事」

あ……。

ああー、私の馬鹿馬鹿馬鹿！！！！

素直じゃないのに、素直になつてるよー。
もう、嫌ー！！！！

「お嬢様が考えてくれたつてだけで、すっごくうれしいよ」

え……。

何、そのまなざし……。
っていうか、優しすぎるよー！！！！

「ま、本当はそれ以上を望むけどね」

……馬鹿執事！

それでも、少しは……

気になった、のかも。

・エピソード・（後書き）

ううーん、不思議な終わり方かも。

ま、いつか

とにかく、こんな終わり方も、ありかな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6891j/>

私は、お嬢様ですよっ！！

2010年10月11日01時15分発行